

◆特集◆

美術は身体とどう向き合ってきたか

—古代から現代まで—

名古屋ポストン美術館 館長
名古屋市立大学 名誉教授 馬場 駿吉

はじめに

美術は私たち人間の生命の器とも言える身体の様々な姿に向き合い、その真髄を表現することによくの力を注いできた。もちろん、人物の他にも風景、静物、動植物などを主題とするものや、抽象的な表現など人の姿が見られない作品も少なくないが、芸術の歴史をふりかえってみると、時代的な社会状況によって、影響を受けながらも、芸術家の身体への関心は受け継がれてきたと言える。筆者は永く臨床医学（耳鼻咽喉科学）にたずさわってきたこと

美術史を見直してみる試みを始めたのだが、その概要を述べさせていた

一 原始美術における身体表現

後期石器時代の遺跡発掘や洞窟の発見によって、約三万五千年ほど前にマンモスの牙に彫られた豊満な女性像が、ドイツ西部の洞窟遺跡から発見されたとの論文が、英科学雑誌『ネイチャー』に掲載された話題になった。日本の遺跡からも一万五千年前の同様な女性像土偶が発見されている。また、洞窟壁面に手掌をあてがいが、そこへイエローオーカー液（水酸化鉄を主成分とする天然土顔料で、いわゆる黄土色の色素液）の飛沫を浴びせ、その掌形が陰画として残されたもの（フランスのコスケール洞窟、約二万年前）もある（図1）。

最近同様な掌形がインドネシア、スラウェシ島の洞窟壁（約四万年前）でも発見されたとの報道もある。



図1

あいちトリエンナーレ二〇一六の矢印型のシンボルマークの色彩にこのイエローオーカーが採用されたのは、現代美術もまた、その発祥の原点から始まった旅途上の隊商宿（キャラヴァン・サライ）であるという考えに基づくと聞く。それはさておき、今述べた有史前の人体への執着は、繁栄と安寧を願う呪術的な目的に沿ったものとも思われるが、その後、現代に至るまで美術が保持し続ける身体重視の源泉を、ここに見ることができないのではないだろうか。ことに人類が持つ創造能力の象徴的な部位としての（手）への強い関心には驚くばかりだ。このような手形の転写はまた、版画の原点だという見方もあることを付記しておきたい。

洞窟絵画における人体の描写も、やがて運動の姿にも及ぶことになる。南イタリアのシチリア島、パレルモ付近のアッダウラ洞窟からは約一万年前に描かれたと考えられる揺れ動



講演中の馬場駿吉氏

く姿態の壁画が見られている(図2)。



図2

二 古代オリエント・エジプト美術における身体の表現

紀元前三二〇〇年頃、中東地域のチグリス・ユーフラテス両河の流域に興った古代オリエント文明の中心的な存在だったのが、アッシリア帝国―その建築遺跡として残された多くの浮彫などには優れた芸術家、職人たちの手になる戦士、朝貢者など、人物の端正な姿が残されている。また、相前後してナイル河畔に興ったエジプト文明においても、人物像に向かう美術活動は盛んで、王、王妃、神官、官吏などに加えて、一般市民の姿も彫像や壁画などに見ることが

できる。とくに死後にも現実世界の継続性を求め、魂の帰る器となる遺体をミイラ化して保存する風習が拡がり、その棺の蓋には生前の姿が美化されて描かれた。身体の描写に正面性と側面性が重視されたのも、聖性を高める効果を感じさせられる。

三 古代ギリシャ・ローマ時代

―身体美の追求―

古代ギリシャ文明が花咲く前には、エーゲ海のキクラデス諸島、とりわけクレタ島に紀元前三千年紀から二千年紀に栄えたエーゲ文明がある。壁画の断片や象牙に彫られた身体の跳躍像などをクレタ島の考古学博物館で観た記憶は今も鮮やかだ。その後、文明の中心はギリシャ本土のミュケナイ付近に移り、有名なアガメムノンの黄金のマスク(前十六世紀)など、その技巧にも緻密さが生まれる。やがて前十一世紀頃より、美術史からは暗黒時代と見なされる年月を経て、前八世紀後半になると、ギリシャ神話の人物像も陶器画や彫刻に登場し、前六〜五世紀における理想的な身体美の追求の成果は、数々の彫刻作品として現代にまで遺されている。米国のボストン美術館に所蔵されている通称「バートレットの頭部」(前三三〇年頃)は現存のアフロディテ(ビーナス)像とし

て、もっとも高貴な美貌を漂わせる(図3)。



図3

ちやうど、このアフロディテの頭部が制作された頃から生じたマケドニアのアレクサンドロス大王の東征によって、ギリシャ文明は東方伝播、いわゆるヘレニズム時代を通るが、大王没後、古代ギリシャ美術の源流はローマ帝国に引き継がれる。だが、身体の理想主義的な追求よりも、やや写実的な傾きを感じさせられる。

四 中世美術における身体の捉え方

―西洋と東洋―

ローマ帝国では二〜三世紀には公認されていなかったキリスト教が、三一三年に合法化される。ユダヤ教、イスラム教も本来、中東地域にルーツを持つ一神教としてそれぞれ勢力を拡大してきたが、一方、多神教の仏教やヒンドゥー教などは、東洋に多くの信者を持つことになる。このような宗教の力が人の社会生活のみ



図4

ならず美術表現にも様々な影響を及ぼしたのは、美術史をふり返ってみると、ここに述べるまでもなく歴然とする。一般にキリスト教世界では禁欲的な宗教観から、身体は原罪の器とみなされ、美術表現の中での輝きを失い、またイスラム世界でも偶像崇拜が禁じられたことにより、身体は美の追求の対象から疎外されることになった。したがって、西欧を美術史の中心とする観点からすると、その復興はルネッサンスの時代を待たねばならず、中世が芸術+科学にとって暗黒時代と呼ばれたゆえんともなっている。ただし、その時代に注ぐ眼を東洋美術史に向けると、インド、中国、日本などには、豊穣な身体、あるいは苦難を負った身体に向き合い、それに迫ろうとした匠たちの存在が浮かび上がる。例えば、インドのアウランガバード仏殿入口の「守門女神像」(六世紀後半)などに見られる豊満な裸像など(図

4)、日本でも平等院の「雲中供養菩薩像」(十一世紀半ば)の優美な空中遊動の姿など、杖拳に暇のないほどである。運慶・快慶による東大寺南大門の「金剛力士像」(十三世紀初め)の筋骨の逞しさはルネッサンスの巨匠たちに魁けて身体が発するオーラを感じさせる傑作だ。最近、現代美術の著名な作家ジャン・デュビュッフエの立体作品に、この金剛力士像の姿勢が引用されているのを発見して驚かされた。

五 ルネッサンス期(十四〜十五世紀)における身体讚美の復興

禁欲的な宗教規範により、身体美の追求が抑制されたヨーロッパ美術も、十四世紀に入ると、フィレンツェを中心とする人文主義者たちの間に人間存在への意識が高まり、それに呼応して美術の分野でも、ギリシャ・ローマ時代に開花した身体美追求復興の機運が一気に熱を帯びる。以来、表現形式を変化させつつ主題の大河をなすこととなる。

この時代に活躍し、後世に作品と名を残した作家は多いが、その中でも巨匠中の巨匠といえば、レオナルド・ダ・ヴィンチとミケランジェロであろう。とくにレオナルドは、身体を表現するためにはその内部構造にも通じなければならぬと、

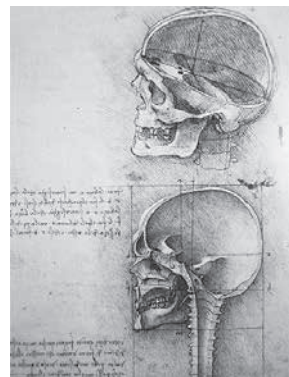


図5 レオナルド・ダ・ヴィンチ 「解剖図譜」より(1489)

解剖学者の協力を得て、実際に約三十体の人体解剖にたずさわり、多くの図譜を残している(図5)。また水力学や近代の機械工学に通じる様々な図像手稿は現代人を驚かしてやまない。その絵画作品で現存する数は多くないが、「モナリザ」をはじめ人物像は姿のみならず人間の精神のありようにまで透徹する眼力を感じさせる。ミケランジェロは並はずれた人体大理石彫刻を生み出すとともに、システイナ礼拝堂天井画の「最後の審判」に見られるように身体を運命を含めて様々なありようを絵画として描き尽くした。その他、ポッティチェルリ、ラファエロなど、

流麗・清雅な人物像を描いたルネッサンス本流の巨匠たちの他、徹底した描写力を発揮したデューラー、欲望や不安を抱いた庶民の姿を時に風刺を混じえて描き出したボスやブリューゲルなど、北方の作家たちの名も書き落とせない。一方、当時新しい技法として開発された油彩を導入し、新しい色彩表現を取り入れたヴェネツィア派のティツィアーノ、ティントレット、ジョルジョーネ、ヴェロネーゼなどは官能美を帯びた女性像を多く残した。

六 バロック時代（十六世紀末～十七世紀）の強調された身体
バロックとは歪んだ真珠を意味す



図6 カラヴァッジオ「キリストの埋葬」(1602-1603)
ヴァチカン 絵画館

るが、調和を重んじたルネッサンス期を過ぎると、劇的でダイナミックなシーンを描くカラヴァッジオやルーベンスが登場する（図6）。その一方で華麗に着飾った貴族や宮廷人の肖像画を手がけたベラスケスや市民社会生活者の日常的な表情を丁寧に描くレンブラント、フェルメールなどオランダ画家たちの活躍も著しいことにレンブラントが自画像を多く描き遺したことは、自己の存在を作品中に直接とどめようとする意識が強かったことを表すものとして興味深い。この時期の作品はルーブル美術館やプラド美術館、メトロポリタン美術館などに多く收藏されていて、教科書にもしばしば紹介され一般にも極めて高い関心を集めている。

七 ロココ（十七世紀末～十八世紀）の雅びな身体美の追求

フランスでは豪華でバロックの極みとも言えるヴェルサイユ宮殿を建てたルイ十四世が没し、十五世在位の十八世紀は次第に国威も衰退に向う。だが宮廷文化は維持され、ギリシャ神話や、現実には野外で繰り広げられる恋人たちの雅びな宴の様子などを、ドラマティックでかつ幻想的に描いたヴァトーが現れる。彼は不幸にして三十八歳で早世することに

したのがブーシェであり、奔放な裸婦を描き「金髪のオダリスク」などの名作を残した。雅園画と呼ばれるヴァトーの系譜を継ぐ存在として十八世紀後半を彩った画家にフラゴナールがある。エロスをふんだんに振り撒きつつ、ブランコに戯れる若い女性とそれを見上げる青年の姿を描いた作が有名。享乐的な面が強いが、それが俗に落ちることなく、屈託のない筆使いで描かれている。名古屋ではヤマザキマザック美術館でロココ期の作品が見られる。因みにロココとは貝殻状装飾文様「ロカイユ」を語源とするという。現代の（ヘカワイイ）にどこか通じるか。

八 印象派における身体へのアプローチ

十九世紀のヨーロッパはフランス革命前後、市民社会化が進み、それとともに芸術領域においても人間の個性の尊重が強く意識されるようになった。その傾向は二十世紀、二十一世紀の近代・現代芸術において、ますます顕著となり、様々な方法で、他者の身体の姿態のみでなく、自己の感覚、運動など機能までもどのように表現するかに挑む試みが行われている。

十八世紀末から十九世紀前半は身体表現にも感情的な色彩の濃いド



図7 ピエール・オーギュスト・ルノワール「浴後」(1888)

ラクローアなどロマン派と称せられる画家が活躍したが、その余映を受け継ぎつつ、光、色彩の視的感覚を大切に絵筆のタッチで画像を構成してゆく作家たちが現れる。印象派の画家たちである。その中でもドガは踊り子をその周辺の空気までも感じさせるように描き、ルノワールは裸婦の輝きを捉えた多くの作品を遺した(図7)。後期印象派に属するゴッホやゴーギャンは、強烈な色彩や描線を駆使して人間存在の本質に迫る人物像を多作。またその目を自己にも向けて描かれた自画像には、内面に抱える人生への疑問と苦悩がありありと感じられる。



図8 ピカソ (1881-1973)「ドラ・マルの肖像」(1937)
徳島県立近代美術館所蔵

風景画や静物画がよく知られているセザンヌにも「トランプをする男たち」や「大水浴図」など、人物を主題とする作品がある。これらの作からもうかがえるように堅固な画面構成や自然な色彩など、一種のクールさを漂わせる画風を確立した。

九 キュビズム(立体派)
―身体の幾何学―
物体(人体を含む)を立方体、円筒、円錐、球形の組み合わせと見なし、これらを幾何学的に構成することによって平面上に遠近法とは異なる立体表現が可能になるというのがキュビズムの主張だ。さらにピカソ

は、二方向から見た顔面を一つに結合させて立体表現を成り立たせることを試み、身体を美しく描くという従来の美術の常識を覆した(図8)。それはまた、人間の本質の一面を表現する意味を生じることにもなった。

十 フォーヴィズム(野獣派)
―色彩を求める身体―

キュビズムが形の表現に革命をもたらす一方で、二十世紀初頭には強烈な色彩表現を特徴とする画家たちが台頭し、生命感溢れる裸婦などを描いた。その代表者の一人がマチスだ。マチスはヴラマンクなどとは異なり、色彩の調和を求める方向に進み、踊る裸婦たちのような軽やかな音楽的な作品を生んで、モダニズム絵画の巨匠となった。

十一 エコール・ド・パリの人物画
第一次世界大戦後のパリ・モンマルトルには多くの国から画家たちが来住し活躍した。モディリアーニ、ロートレック、藤田嗣治などが歓楽と哀愁を帯びた様々な人物像を描いた。

十二 ダダ、シュルレアリスムの
身体

第一次世界大戦中から戦後にかけて、芸術概念に変更を迫る考え―ダ

ダイスムが生まれた。既成概念を捨て、事物に新しい意味を見出そうという考えだ。美術ではマルセル・デュシャンが既製品の便器に「泉」という題をつけて出展し物議をかもした。一方、身体運動を美術作品に定着する方法にも挑戦(図9)。それを引き継いだシュルレアリスムは現実と想像や夢の世界との通路を拓く作家たちを輩出させた。なかでもダリは肥大化した身体を、マグリットは空中に浮遊する人物を描いた。



図9 マルセル・デュシャン (1887-1968) 「階段を降りる女」

十三 抽象表現主義絵画

―運動する身体の軌跡―

床に広げた画面に絵具を飛び散ら

して、身体運動の軌跡をとどめる作品が第二次世界大戦後のアメリカ、フランス、日本で展開された。ジャクソン・ポロックが最も有名。第二次世界大戦後、美術の中心がニューヨークに移ったと感ずるほど、様々な実験的試みが行われたが、フランスでもアンフォルメルと称する抽象絵画表現がさかに行われ、身体を描くというよりも身体で描くという意識が主導する美術家たちが多く現れた。

十四 ポップ・アートの肖像画

現代美術が抽象表現に大きく傾く一方、消費社会の中での身体のあるようにクローズアップさせるアーティストたちが出現してくる。アンディ・ウォーホルがその代表。消費社会に浮遊する有名人の肖像画を多産した。

マリリン・モンローから毛沢東まで、マスメディアを賑わせた様々な人物の同一肖像写真に人工的に施す色彩を変えて多くのヴァージョンを作成するなど、主題人物の実像と虚像との間があいまい化・浮薄化される大量生産・大量消費社会のありようを示したのだった(図10)。ポップ・アートが単なるカウンター・カルチャーで終わることなく、一定の意味を持ち続けているのは、社会現

象として見えているにもかかわらず潜在している時代の本質を、顕在化させたことによるものだろう。



図10 アンディ・ウォーホル (1928-1987) 「マリリン」(1967)

十五 現代美術における身体観

補遺

これまで、従来の美術史的な観点から、各時代の身体観の変遷をたどってきたが、ことに多様性を極める現代におけるその様相の各論的な面で今少し補遺的に追記させていただくことにする。

① オプティカル・アート

―錯視現象の応用―

ヴァイクトール・ヴァザリリ(二九〇八〜九七)は、平面の絵画

作品中の図形に極端な遠近法の描写を応用し、画面から突出あるいは陥凹する三次元的空間を錯視させる方法を駆使する作品を制作。デザインの世界にも応用された。こうした技法は現代において発明されたものではなく、いわゆる「だまし絵」的な画像にも応用されている。それが一層洗練化され、現代的なイメージとしてリニューアルされたものとも言えよう。ただし、これも従来からの身体機能の範疇にとどまるものとも言えよう。このほかエッシャーの空間的な関係性を狂わせる技法も一種のだまし絵技法の応用だと言える。

② 近代の解剖学的美学

筆者が一〇年ほど前にニューヨーク市のホイットニー美術館を訪問した折、不思議な頭部側面の解剖学的な図像で顔面神経の複雑な走行分布が描かれている作品が展示されているのに気付いた。作家名はチェリ・チェフ（一八九八～一九六七）の“God of Rain”と題する作品だ（図11）。レオナルド・ダ・ヴィンチの解剖手稿の現代版とも言える正確さで、細密に描かれた作品には驚かされた。最近、日本画家の松井冬子が「九相図」（ことに女性の遺体が白骨化するまでの九態を時間的に追って描いた仏画の一種）のシリーズと呼ぶ連作が話題を呼んだことを重ね合

わすと、興味深いものがある。



図11 チェリ・チェフ (1898-1957) 《God of Rain》(1947)

③ 美術は視覚的表現にとどまらない

美術は表現者・鑑賞者ともに視覚に依存する面が重いことは当然といえ、例えば当然なのだが、しかし、現代では美術の概念には大きな変更があり、また美術展示のあり方も変わり、パブリックアートなど野外に設置され、触覚により存在や形象を確認可能な立体作品も増えつつある。また、作品展示を含む空間全体が作品として呈示されるインスタレーションも普及しつつあって、建築や庭園などと同じように、観賞者はそこへ身体

のすべてをあずけ、視覚以外の感覚も協調させて芸術的感興を享受できるようなしようという社会的努力も、徐々にではあるが始められている。また美術館や教育施設などでも視覚障がい者のために触覚的な鑑賞を可能にする試みも進められつつある。元来、多様な世界を認識するには、芸術的な感覚のみではなく、科学、哲学などを総合して初めて達成できるものであり、視覚を失っても残っている感覚器官を協調させることにより、視覚の役割を補うことができ、人は活性化された生命の維持が可能になるという考え方が生まれつつある。こうした美術の本質的概念の変更への対応を先取りしたのが、荒川修作（名古屋出身、一九三六～二〇一〇。一九六一年よりニューヨークに渡り、パートナーである詩人マドリン・ギンズとともに国際的に活躍）である。彼らが発案して建設された養老天命反転地や東京の三鷹天命反転住宅は、床面の傾斜などが身体の平衡感覚器官に刺激を与え、それにとりまとう神経、筋肉への負荷入力が生命の活性化に寄与する、という考えの下に実現した建造物である（図12）。このような理論の有効性の検証は容易ではないが、医学的な仮説としてはきわめて興味深いものがある。



図12 養老天命反転地 (竣工 1995年8月)

④ 身体の部分にこだわる現代美術
 身体を様々な部分である各種器官の総合であるという認識の一方、逆に、部分の方からその仔細を見直すという気運も強まる。医学の分野でも生命現象の追求には分子生物学という極微の世界の仕組みを解明する学問を発展させてきた。その原則は芸術にあっても共有される。

筆者が一九六四年に初めて出会ったのが、当時金属の巨大な耳ばかりを造り続けていた三木富雄という作家だった。元来、耳鼻咽喉科が専門だった筆者にとってきわめてシヨツ

キングな出来事だった。その本格的な個展がそれからしばらくして東京の画廊で開催されたとき、展示された一番小さな、手のひら大の耳を買い求めた(図13)。その後、先天的に外耳が欠損して生まれた子どもの耳を再建する形成手術の新しい方法をアメリカで学び、その改良を重ねて、その後医学の現場でほぼ五百例の耳の再建手術を施行させてもらった。NHKテレビの「耳を造る」という放送番組に出演したことがあったが、そのとき三木の「耳」作品には三木の作家としての主張が見えるが、医学上、私の場合には、術者としての主張を消し、一般の人たちの耳に紛れ込んでゆくような耳を造ることが必要であることを、最後に述べた記憶が残っている。

もう一つの私の医学専門領域と結び合う美術作品のエピソードがある。今から十年近く前、東京の画廊での加藤力(一九六九年生まれ)個展



図13 三木富雄 「耳」(1963)

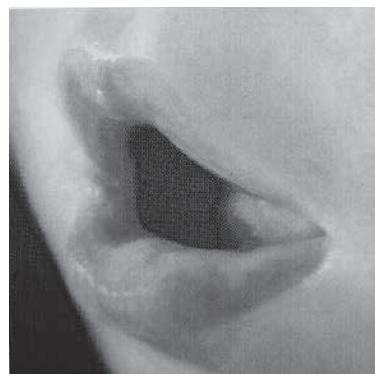


図14 加藤 力 (1965-) 「ここから、はじまる」 (2007)

で出会った油彩作品「ここからはじまる」である(図14)。六〇×六〇cmの画布に大きく拡大された赤ん坊の唇だけが描かれていたのだ。この作品の題のように、生まれた赤ん坊の口は産声を上げ、呼吸し、おっぱいを吸い、やがて初めてのことばを発する部位だ。「ここからはじまる」という唇周辺を数え切れないほど見続けてきたのに、この作品とその画題に驚きの眼をみはった自分が少々恥ずかしく思えたのである。このような力を持つこの作品は、きわめて具象的な作品なのだが、まさしく現代美術と呼ぶにふさわしいのではないかと思わされることとなった。美術作品は先入観なしに、素の自

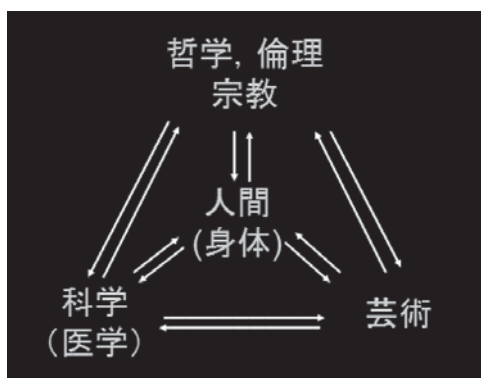


図15

たい。

人間の生命と魂の器でもある身体は、今後も美術表現の王道に立ち続けることを信じて、この稿を終わりたい。

図15)。

むすび

医学の領域に永く生きつつ、美術など芸術領域にも立ち合い続けてきた立場から、この一文を草させていただいた。むすびとしてここに掲げる図は、身体をめぐる今まで私が考え、論じてきた諸項目の関係を示してみたいものである(図15)。

分と初めて対面することがきわめて大切であることを思い知らされた一点である。